

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	天下の數勢遂に三に歸せんか : 論説
Author(s)	安東, 俊明
Citation	龍南會雜誌, 18: 9 - 15
Issue date	1893-06-27
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/4087
Right	

語の作者と、月光皎潔に「インスピレーション」を受けて、赫哉姫をば月界より迎へ來えなり。
されば赫哉姫は宛も月の如きなり、塵世のものにはあらず、優に眞善美の齊一を保ちて、敢て塵寰に
侵す所とならざりしなり。更に月の如く、千万人の人の心を樂しませども、敢て一人の私する所とは
ならざりえなり。偶々之を得たりとするものは、猿猴水を掬して、月を得たりとなまじ一般、其得たり
どあすものは月の映像なりしなり。

竹取の翁の正直よして無邪氣なる、石作皇子の『心のしだくみある』東持の皇子の『心たはうりある』、
財豊に家廣き阿部の御主人の愚なる、大伴御行の怯弱なる、石上麿の熱情盛にして智謀足らざる、皆
悉く一種の特質を備へ、潑々どえて篇中に躍如せるを覺ゆ。

結論

我自から揣らず、猥りに我文學史上の至寶を論あがつらひぬ。其繁育を得ざりしや、固より自かく之を知る。
而も敢て之を爲る所以のものは、近年歴史輪切躰なるもの頻りに行はれ、未だ文學史の輪切躰なるもの
なきを怪しめばなり。間々文學者を捉へ來りて論ふものあれど、或時代の文學の中心たるべき好著
述を、捉ふるものなきを悲しめばなり。我微衷は洵に此に存する。更に終に臨み、一言以て此ながく
しき數章の文意を閉づ。曰く竹取物語の作者と、宛然英のアヤソンか。

(完結)

天下の數勢遂に三に歸せんか

安東俊明

古に鼎あり、其足三、徒に之を看過すれば事体固より輕々たるのみ、然れども天下遂に所謂鼎足の勢
なるものあるは何ぞや、易に天地人あり、所謂宇宙の三極にして、天下の能事蓋し是より出づ、人生

亦三種の徳あり、之を知仁勇となす、實に人間行爲の基本と云ふべきなり、幾何學の定理に曰く、一個の直線形をなさんとするには必ず三直線を要すと而して其得たるは三角形にして實に直線形の基本なり、故に或は三角術なるものあり、又化學者物質の化學的性質を分ちて三とす酸性、鹽基性、「アルカリ」性はなり、其分合聚散する所、幾多の化學作用を起すなり、天地萬物の間三數れ及ぶ所蓋し甚奇なるものあり、

熟々古來人間社會に於て三數の働く所を察すれば殊に奇々妙々の形跡を認むるもの多し、伏て惟みれば 皇國開闢の初に當りては三數の神寶備はり明教、威徳の大本已に定まらり矣、醍醐帝の朝には小野道風、藤原行成、藤原佐理あり、並に書を善くす世之を三蹟と稱す、菅相公朝を退きて時平勢を得、仲平、忠平と兄弟三人相續て關白職に居り並に大政を執る世之を三平と稱せり、足利將軍の治下室町に三管領の制あり、斯波、細川、畠山の三氏更るく管領たるなり、時の鎌倉亦之に擬して三管領制を立つ、扇谷、山内の兩上杉及前の鎌倉管領氏滿の弟滿直と更るく之を領するなり、中古戰國の時代にありては織田右府豊臣太閤徳川將軍あり、共に一世非凡の英傑にして性行事蹟三個別種各一方の雄將たり、徳川氏は治世間文學有爲の士多し而て其特に偉大なるもの三八、之を伊藤仁齋、熊澤了介、及物徂徠とあす、徂徠自ら稱して曰「伊藤仁齋之道德、熊澤了介之英才、與余學術合爲一、則可謂聖人矣」と三數の技能想見すべし、近時西郷南洲大久保甲東、木戸松菊は、明治維新の三傑として名聲今日に赫灼たるあり、三數の及ぶ所蓋し見るべきあり、

去りて之を支那に徴せんか、秦天下を失して劉邦沛に起り、漢家四百年の基を開きたるは主として蕭何、張良、韓信の力に由る高祖自ら稱して曰く「夫運籌帷幄之中決勝千里之外吾不如子房填國家撫百

生給餽餉不絶糧食吾不如蕭何連百萬之衆戰必勝攻必取吾不如韓信此三人者人傑也』と後漢の光武と鄧禹馮異馬援の三傑を用ひ、西漢亂れて群雄奮爭遂に魏吳蜀の三分鼎立となり、關羽張飛玄徳の三傑あり鞠躬盡力其際に馳騁するを見る、唐の太宗も亦專三人を用ふ、杜如晦、房玄齡、魏徵皆奇傑の士なり、其他支那古の制に三公京兆尹、左馮翼、右扶風あり、天子の近衛に三軍の衆あり、或は三諫の事と云ひ若しくは三年の裘と云ふが如きものは三數の至理に基くゝあらざるなきを得んや、更に轉じて之れを西洋の事實に見よ、希臘諸州中前後に起りて一時全土に主權を張りたるもの三、

アセン、スパルタ、セベスはなり、アセンは文を以てスパルタは武を以てセベスは殆ど其中を以て各一時の盟主たり、波斯戰爭の年代よりありてはアセン三人の豪傑を出す、「ミルチアデス」「セミストクリス」「アリストタイデス」是なり、一は俠勇を以て一は知謀を以て一は率直を以て共に一世に雄飛しアセンの形勢否寧希臘の形勢に幾層の光彩を加へたり、羅馬共和政体愈々を群雄黨類相搏ち相殺せる際三頭政治の偉觀を示したるは「ボムペイ」「シイザル」「クラッソス」にあらずや、第一トライアンヴィレート倒れて更に第二のトライアンヴィレートを演ぜたるは「オクタビウス」「アントニー」、及「レピダス」の三傑とす、此等の組織に至りては三者勢力の消長する所甚歴然たるものあり、見ずや「クラッソス」死して両雄並び立たず、「レピダス」其三分の一を支ふるの能なくして第二の組織亦忽ちにて破れたるを這般の勢多くは三にあふざれば成らず、鼎足の勢盡免るべからざるを知るなり、以太利建國の際亦三傑人あり「ガリバルヂー」と曰ひ「カプー」ると曰ひ「マッザニ」と曰ふ、一は俠勇無双の軀幹を以てし一は爲政者たるの卓識雄略を以てし、一は純白高傑而も天下を融化するの熱誠を以てす、若し夫を此等一を欠きたりとせんか、以太利建國の大勢上豈に多少の支吾なきを得ん

や、曾て佛蘭西の「ルイ」十四世進取の略を以てスバニッシンチザランドを併せんとするや和蘭瑞典及英吉利は之に對して三國同盟をなし、又「ルイ」十四世が西班牙を併有せんとしたる時には所謂「フランス・プロテスタンツ・ライアンス」グランド・プロテスタンツ・ライアンスあり則英吉利、日耳曼和蘭の三國同盟なり、有名なる七年戦争に於ては「フレデリック」大王の旭日の勢あるを見て魯西亞、佛蘭西は壤太利と合して三國聯合をなしたり、此他中古戦闘攻伐の間所謂「トリップル・ライアンス」を組成する少しとせず、晩近三國同盟の最強固にして且つ最著名なるは普佛戦争後に於ける獨逸、以の三國同盟なりとす

以上東西古今に通じて列擧したる事跡中或は偶然三の形に従ふもの亦之なしと云ふべからず、然れども亦多くは三の數勢に従ふものたるを知るべし、試に問ふ鼎足二ならば則如何と、是れ固より轉倒傾覆得て安置すべきにあらず然らば則鼎足の三なるは數なり勢なり、人或は言ふん、鼎の立つや必ずしも足の三なるに限らず、四たるも立つべし、五たるも立つべし、六七八九たる皆以て立つべしと、其事固より然り、然れども三足已に鼎を安置するに足る、何を苦んでか又多を用ひん、故に知る、三足は以て鼎を安置する所以の根本的要件なることを、四五六七あるも亦畢竟するに三の働を充たすに過ぎざるなり、別に之を云はゞ、數勢遂は三に歸するの意たるに外ならざるなり、蓋し、一とは絶對にして、二は相對未勢の定まるあるを見ず、三に至りては則數勢を決定するの第一着歩たるなど、吾人之を聞く、力學の法則に「Triangular system of force」あり、三ヶの力三直線の方角に働く時此の三種の力が平均に歸するは此三直線を以て三角形の形に置くを得るの時にありと、是最正式に三の數勢の決する所以を示すものにあらずや、之を大にしては國力の平均と云ひ、之を小にしては權力の平均と云ふもの、畢竟するに這般の數勢に従ふものにして三國若しくは三人ありて始めて其間に成立せる

ものとす、若し夫れ幾多の邦國幾多の人衆あるも結局三の形勢に従はざれば以て平均を得ること難
まど云ふべし、

凡天下の事物皆兩極あらざるはなし、已に兩極あり、是を以て彼に偏せず此に黨せざるの部分ありて
別に一個の中なるものを成す、故に宇宙、天地ありて萬物其間に生じ人を以て靈となす、此三極は以
て宇内の位を定むる所以なり、人知勇あり、仁茲に發、孝て人道全きを得、顧ふに知勇あり、仁其間に
發すとは未だ之を古人の説に聞かず然れども予を以て之を見れば少しく説あり、夫知と勇とは人間
生れ得て自ら之あり、之を人間始原の能力と云ふも可あらんか、仁に至りては少しく之に異なり必ず
や人間發達の時に從て發起するものなく、論語に『子曰有德者必有言、有言者不必有德、仁者必有勇、
勇者不必有仁』あり、此言固より知仁勇發生の時期を説きたるものにあらざとせるも、今假りに所謂
有言者を以て知の一部を顯はすものとせば、知勇は人皆之あり「固より多少はあり」仁に至りては先
づ發するものにあらず、故に人往々に孝て之を欠ぐ、只知勇の間に發し彼に偏せず此に傾りず知を兼
ね勇を併せ之を纏め得て仁の一体を爲すの意自ら伺ひ見るべし、知なく勇なくんば仁亦固發明する
所あるべからず知勇先存して仁茲に顯はる、是を以て三德備はり人道立つ矣世已に大小上下あり、
是に於てか中必ず起るは數勢の然る所、已に夫婦あり、兒子必づ之に従ふ亦定數たるなり、事に大中
小あり、物に上中下あり、而して後位始めて定まる、人に夫婦あり、人類の生存是に於てか成る、之
を政海の黨派に觀よ、保守黨頑乎として止まり、急進派勃然として跳れば所謂温和なる中立派出で、
茲に三分の勢を馴致す、曾て佛蘭西王政傾き民黨勃興革命の氣雲簇々として起るの日、黨類四に起り
奮闘極りなきの間、立法院中最有力なるもの遂に三に歸す、立憲王政黨あり「ラファエット」等の賛成

する所當時の保守黨とも云ふべく、ゼ、マウンテン あゝ最急激ある民黨に於て「ロベスピエール」、
「ダントン」等之が領袖たり、又一種の革命派あり、第一者よりは激にして第二者よりは温和なる共和
黨にして「ローランド」「デモリエー」等之を指導せり、院内別に獨立黨なるものありしと雖も勢薄
弱、要するに三黨鼎立の間に介在するのみ、此他古往今來黨派の兩極に分れて更に中立若しくは獨立
を生出するの勢となるもの類例極めて多し、是れ已に世の明かに認識する所たり、二人或は争ふこと
あり、第三者之を和解し、兩國戦あり、局外の一國之が和親を道くが如きは天下最普通の事となす、一
人にして事を思ひ二人にして事起り、三人にして事定まる蓋し又數勢の然らざる所以にあらずや、
世俗又三番勝負、若しくは三拳の事あり、共し三を以て勝敗の數勢を決するなり、又或は理財世界の
事に觀よ、開明の貿易に三角貿易法あり、三國取組の貿易にして彼此の間際信用手形を以て商品の
取引をなし、正金の授受は之を同國內の商賈の間を爲すの商略なり、同じく三數の關する所にして此
他論理學には三段論法あり、心理學には知情意の三能を論するが如き、事々物々、觀し去り觀し來れ
ば三數の宇内に關はる所、甚奇にして且妙なるを覺ふ、吾人は於てか云ふ、天下の數勢遂に三に歸
せんりと、

吾人之天下已に此數勢あるを見たり、吾人と雖も遂に此數勢に従はざるべからざるものあり、其然り
然りと雖も吾人豈又此數勢に乗するの能力なしと爲さんや、自然の數勢に従ふは理固より當に然る
べし、只其之が爲に驅役せられ徒に數勢の囚虜となり了るが如きは是決して能事者の事にあらず、見
よ、天下の氣運を察して風雲を叱咤し、事理を推して數勢に乗するは、古來英雄豪傑大人賢者の
由て以て力を展ばせ、由て以て偉功を奏する所以にあらずや、之を譬へば流に掉すが如し、流とは自

然の數勢なり、掉すとは自然の數勢に乗するあり、夫れ天事人物固より大小緩急あり、徒に自然の流運に任せば迂回轉々遂に機失し事去るの悔なうらざらんや、是を以て物大小に従ひ事緩急に應じ、天下の數勢を達觀するの眼光と快刀亂麻を斷つの手腕とを以て直に自然の流運を捕へ鞭撻驅役駭々として歩武を進めば天下の事蓋し成ざるの理なけん、

内田遠湖曰、君臣父子夫婦、謂之三綱、世界難廣、人類難衆、所謂社會者、莫不由此而立、此篇獨遺之者何哉、

雜 錄

回顧すれば今や既に三星霜、明治二十四年十一月秋方きに高く馬方きに當り吾校大舉して兵式旅行を福博の地に行ふや豪遊旬日鎮西北半の山野を跋渉し勇を養ひ智を磨き以て大に得る所ありこれ實に我長途行軍の嚆矢にして爾來此舉歲毎に盛を加へ以て今年に及べり然らば則ち福博行軍や實に我校の歴史上特筆して永へに忘るべからざるもの然るに當時未だ本會の設あらず従つて其日乗僅かに一家の私記として篋底に藏するあるのみ以て本校の歴史として後日の追憶に資するなし我齊常に以て憾みなす近る幸に我笠間先生の「修學旅行日記」を獲たり蓋し此行に於て本校殊に先生に屬するに旅行記事の任を以てせり故に先生の記一家私記の体に非らず自から善美なる本校の歴史なり我齊の喜何なか加へん乃ち先生に請ひ得て雜錄欄に掲げ以て諸士の劉覽に供す嚆矢に此の行にありしものは此を看て以て當時の快遊を追想すべく後の本校に來り遊ぶものは此を讀て我行軍の起源する所を審かにせよ以て宣くし我楢園先生に大謝すべしと云爾

兩筑修學旅行日記

教 授 笠 間 益 三

編 者 識

○六日。晴。午前七時を期し。職員生徒一同。學校に相集會せり。職員二十九人。生徒凡る一百六十人。